

# 人の同一性の問題において思考実験が示すこと

福田 敦史

## はじめに

人の同一性の問題という哲学的問題がある。これは、あるときの存在者とあるときの存在者とが同一の人であるための必要十分条件は何か、という問題である。この問題に対処する立場は多岐にわたるのだが、あえて単純化して区別するならば、ひとつには、私たちの意識的・心的なものにその根拠をおく立場をあげることができ、もうひとつには、私たちの身体的・物質的なものにその根拠をおく立場をあげることができる。

この、人の同一性を巡る議論では、自説の立場を説得的なものにするため、多種多様な思考実験が取り上げられることが多い。小論では、人の同一性の問題を巡る議論において、これらの思考実験が明らかにしていることは何なのか、という問いに取り組む。

この問いに取り組むための準備作業として、1節では、人の同一性の問題についての簡単な紹介をする。続く2節では、いくつかの思考実験を紹介し、人の同一性を巡る議論で、どのような思考実験が提示され、そして、どのような主張を導き出すことができるとされているのか、を確認する。3節では、2節でとりあげた思考実験とその帰結から、思考実験がどのようなことを示していると捉えることができるのか、を論じる。

あらかじめ結論に簡単にふれておくならば、小論は、人の同一性の問題における思考実験の議論が論点先取ないし循環論に陥っている、と捉える。しかしながら、人の同一性の問題における思考実験の議論が循環論に陥っている、というこの事態は、むしろ、人という概念が原初的なものであることを示しているのだ、と結論づける。

大きな主題に比して小論は簡粗で手短なものではあるが、全体の簡単な見通しを立てることを目指したい。

## 1.

哲学的問題として論じられるものに、人の同一性 (personal identity) の問題というものがある。この問題は、例えば「ある時点  $t_2$  における人

(person)  $P_2$ が、それより前の時点  $t_1$ における人 $P_1$ と同一であるために必要にして十分な条件は何であるか」と定式化される問題である。もう少し具体的に、かみ砕いて述べるならば、例えば「今日のマキさんと、10年前のマキさんとが同一人物であることの根拠は何か」というものである<sup>1</sup>。

この問題に対する立場としては、伝統的に意識説あるいは心理説と呼ばれる、私たちの意識的・心的なものに着目するものがある<sup>2</sup>。この立場によれば、 $P_2$ と $P_1$ とが同じ人であるのは、 $P_2$ と $P_1$ のあいだに、何らかの意識的な繋がりをつけられる場合ということになる。「意識的な繋がり」がどのようなものであるかは、心理説論者のなかにあってもいろいろであり、加えて、必要とされるその強度にも論者によって違いがあるのだが、繋がり例としては、例えば、記憶(想起)、信念、欲求、性格、習慣、意図や計画、一人称的観点などがあげられる。人の同一性の問題を巡る議論では、この心理説が伝統的に最も賛同者の多い立場といってよいであろう。

この心理説に対して、私たちの物理的・身体的なものに着目する立場がある。こちらの立場も多様であるが、例えば、私たちの身体に着目するもの、私たちの生命を支えている生物学的機構に着目するもの、脳のうちの脳幹に着目するもの、などをあげることができる。このうち、例えば、生物学的機構に着目する動物主義(animalism)という立場によれば、 $P_2$ と $P_1$ とが同じ人であるのは、 $P_2$ と $P_1$ のあいだに同じ生物学的機構が存する場合ということになる。 $P_2$ を人という生命体・生物として生かしている生命システムが、 $P_1$ を人という生命体・生物として生かしている生命システムと同じである場合に、 $P_2$ と $P_1$ とが同じ人である、というわけである。

現今の人の同一性の問題を巡る議論は、私たちの意識的・心理的のものに着目する、広い意味での心理説諸派と、やはり広い意味での私たちの身体的・物質的なものに着目する諸派との論争がひとつの軸になっていると

<sup>1</sup> 後者の説明の例では、同じ「マキさん」をすでに提示してしまっているため、同一性の問いとしてはいささか奇妙である。しかし、人の同一性の問題がこのように立てられてしまう、というこの点は、この小論で扱う内容と重要な関係にある。

<sup>2</sup> 表記の簡便化のため、今後は「心理説」と表記することにする。

いってよいであろう<sup>3</sup>。

こうした人の同一性を巡る議論では、自説の説得力を高めるために、しばしば思考実験 (thought experiment) が用いられてきた。もちろん、思考実験は、他の哲学的問題の領域においてもしばしば用いられるものであるが、とりわけ人の同一性を巡る議論では、あたかもScience Fictionのような状況が提示されて論じられることがある。例えば、人が分裂した場合、脳を移植した場合、脳を分割した場合、脳と身体を交換した場合、意識と身体を交換した場合、人がテレポートした場合、何千年も昔に実在した人の心を人が持った場合、人が超低温で冷凍保存された場合、などなど無数にある。

思考実験は、現実世界において実行することができないがために、代わりに思考のなかにおいて実験をするものであるから、現実世界において可能ではない状況が提示されること自体はおかしくはない。しかしながら、ある思考実験が、現実世界から遊離するのみならず、そもそも原理的にあり得ないようなことが想定されていたり、何が現実世界と共有されていて何が現実世界とは異なる想定なのかが不分明であったり、あるいは、現実世界とは異なる想定がその他の因子に与える影響についてほとんど考慮に入れられていない、などといった場合には、その思考実験から一定の帰結が得られるとしても、その帰結をそのまま鵜呑みにすることは控えるべきである、とは言えるであろう<sup>4</sup>。

次の節からは、人の同一性の問題を巡る議論のなかで提示されたいくつかの思考実験をとりあげる。そして、どのような思考実験が、どのような帰結を引き出す、とされて用いられているのかを確認することにする。

---

<sup>3</sup> この小論では、立場の詳細な紹介が目的ではないのでごく簡単なものにとどめる。当然のことながら、意識的・心理的なものに着目する立場の内にも、身体的・物質的なものに着目する立場の内にも、さまざまな立場の違いがあるし、この両者の他にも、主要な立場と呼んでよいものがある。しかし、これらの話題を扱うことも、ここでの目的から外れるので扱わない。

<sup>4</sup> 人の同一性の問題における思考実験の濫用を批判するものに、著名な著作としてWilkes (1988) がある。また、思考実験についての簡潔な説明と共に、思考実験に取り組む際の注意がうながされる最近の入門的な著作として金杉 (2022) がある。

次のような思考実験を見てみよう。

**脳移植ケースその1**：いま、あなたのところに、マッド・サイエンティストがやってきて、あなたに脳の移植手術を施すことになった、と告げたものとしよう。突然このようなことを言われたことも驚きだけでも、その手術の内容はさらに驚くべきものであった。このマッド・サイエンティストによれば、手術は次のようなものである。まず、あなたの身体から、あなたの脳を取り出す。次に、取り出されたあなたの脳は、精巧に作られたレプリカントに移植する。もちろん、あなたの脳とレプリカントとは生理学的にまったく支障なく結びつけられる。一方、残されたあなたの身体には、まだ何の情報も書き込まれていない超-ICチップで構成された「機械の脳」が埋め込まれる。この機械の脳には、お好みで、過去の偉人たちの脳情報を流し込んでもよいし（マッド・サイエンティストは、なぜかナポレオンやアインシュタインの脳情報を手元に持っているらしい）、あるいは特定の人物のものではないベーシック・パッケの脳情報を流し込むこともできるそうだ。

と、このようなものである。もし、この「脳移植ケースその1」のような手術が実施されたとして、あなたと同一の人であるのは、あなたの脳が埋め込まれたレプリカントの方であろうか、それとも、機械の脳が埋め込まれたあなたの身体の方であろうか。

推測とはなるが、おそらく多くの人が、自分の脳が埋め込まれたレプリカントの方が自分である、と考えるのではないだろうか<sup>5</sup>。そして、その理由は例えば次のようなものかもしれない。「私の脳が埋め込まれたレプ

---

<sup>5</sup> とはいえ、この事例でも「機械の脳が埋め込まれたあなたの身体の方」を自分と捉えるひともいることだろう。野矢（2022）によれば、類似の思考実験の状況で、自分の身体を継続的に持つ候補者を自分自身であると考えたひとが「けっこういた」そうである。また「どちらも自分と同一ではない」「自分は存在を終わってしまった」と考えるひともいることだろうが、ここでは議論の都合上、脇におかせてもらうことにする。

リカントであるならば、自分の過去の経験を思い出すであろうし、私がやろうと計画していたことをこれからしようとすることもできるだろうし、自分の知識、性格、嗜好、といったその他諸々のことも、このレプリカントは引き継いでいるだろうから」と。

意識のつながりがあれば元の人と同一の人である、という考えは、ロック以来の伝統的な心理説の立場である。そして「脳移植ケースその1」は、ロックが意識の繋がりこそが人の同一性の根拠であることを示す際に用いた「王公と靴直し職人」の思考実験の同工異曲にあたる。

**王公と靴直し職人のケース：**ある王公の靈魂がその王公の過去の生活の意識を伴いながら、靴直し職人の身体に、靴直し職人自身の靈魂が去るやいなや入りこみ、宿ったとしよう。だれしも、この男は王公と同じ人で、王公の行動だけに責任をもつと、そうみるだろう<sup>6</sup>。

心理説の主導者の一人であるシューメイカーも、ロックのこの「王公と靴直し職人」の思考実験を下敷きにして、心理説が説得的であることを示すとされる思考実験を提示している。シューメイカーのものもせっかくなので紹介しておこう。

**ブラウンソンのケース：**ある日、外科医は彼の助手が大変な過ちを犯してしまったことに気づく。二人の人物、ブラウン氏とロビンソン氏が脳腫瘍の手術を受け、両者の脳が摘出されたのであるが、その手術の最後の段階において、その助手がうっかりブラウンの脳をロビンソンの頭に、ロビンソンの脳をブラウンの頭に入れてしまったのである。この二人の内一人はすぐに死亡し、もう一方、つまり、ロビンソンの身体とブラウンの脳を具えた方が麻酔から醒め、意識を回復する。ここでこの後者を「ブラウンソン」と呼ぶことにしよう<sup>7</sup>。

<sup>6</sup> Locke (1975), 第Ⅱ巻, 第27章, 15節。なお、補足しておくとして、ロックのこの思考実験でのポイントは、意識が移されることであって、靈魂が移ることにあるのではない。これは「脳移植ケースその1」で、脳が移植されることでもって、意識的なものが移植される、ということがポイントであるのと同様である。

<sup>7</sup> Shoemaker (1963), p.23. (邦訳24-5頁)

ブラウンソンは、名前を尋ねられれば「ブラウンだ」と返答し、また、ブラウンソンは、ブラウンの過去の経験を自分のこととして語る事ができ、ブラウンの家族のことなどを知っている。一方で、ブラウンソンはロビンソンのことは何も知らないし分からない。その後も、ブラウンソンは、ブラウンと同質の行動をとるが、しかしながら、それはロビンソンの行動形態とはまったく異質のものであった、と説明がなされる。シューメイカーによれば、ブラウンソンは、ロビンソンの身体を有してはいるものの、本当はブラウンなのだ、と私たちは主張したくなるだろう、とされる。

確かに、「脳移植ケースその1」に類した、これら一連の思考実験のケースが提示されると、私たちの意識的なもの・心的なものが、脳（あるいは靈魂）と共に移転し、この脳が移転している候補者が、元々の人と同一である、と考える傾向が私たちにはあると言ってよいと思われる。実際、これらの「脳移植ケースその1」に類した思考実験の事例は、心理説を後押しするものとしてしばしば用いられているのである。

しかしながら、少し要素を変更するだけで、同様の状況であっても、結果はまた異なるものが引き出されるように思われる。次の思考実験を見てみよう。

**脳移植ケースその2：**（またもや）あなたのところに、マッド・サイエンティストがやってきて、あなたに脳の移植手術を施すことになった、と告げたものとして。マッド・サイエンティストよれば、あなたの脳は病魔に冒されこのままでは脳の機能が働かなくなってしまうそうだ。この事態に対処するため、あなたの脳細胞を、脳細胞と同様の大きさの微小な人造部品と交換することを勧められる。ただし、この人造部品は、あなたの脳細胞とまったく同等の生化学的機能を備えてはいるのだが、残念ながら、あなたの記憶や知識、性格などといったものを受け継ぐことはできない。しかし、他にあなたを救う方法はないのだ！この交換は微細なナノ・マシーンによって苦痛も何も感じることなく、数年の長期に渡って行われるそうだ。あなたは麻酔を受ける必要もベッドに寝たきりになる必要もなく、通院生活を送りながらこの手術を受けることになる。ナノ・マシーンはあなたの脳細胞を1個、人造部品に入れ替える。次にもう1個、人造部品に入れ替える。そしてまた1個入れ替える、という具合に続けていく。最終的に、あ

なたの脳とまったく同等の機能を備えた人造部品で作られた「機械の脳」をあなたは具えることとなる<sup>8</sup>。

この「脳移植ケースその2」では、最終的に存在しているのは、機械の脳を具えたあなたの身体を有する存在者である。そして興味深いことに、「脳移植ケースその1」では、このような存在者を自分であるとは捉えなかったのに対して、今度の「脳移植ケースその2」では、この最終的な存在者を自分の後継者である（自分が存在し続けている）と捉える人が多いのではないだろうか<sup>9</sup>。例えば、現実世界において自分が全生活史健忘に陥り、過去の自分との意識を通じた繋がりを失った場合を想定するとしても、それでもやはり、その全生活史健忘に陥った人は自分である、と考えていることが奇妙ではないのと類比的に、この機械の脳を具えたあなたの身体を有する存在者を自分である、と考えることもじゅうぶん説得的なものである。

しかし、そうすると、「脳移植ケースその1」と「脳移植ケースその2」では、どちらも自分の脳を移植し機械の脳と交換するという思考実験ではあるものの、「脳移植ケースその1」では、「自分の脳を具えた機械の身体という候補者」が自分であると考えており、他方、「脳移植ケースその2」では、「機械の脳を具えた自分の身体を有する候補者」が自分であると考えている、ということとなる<sup>10</sup>。

---

<sup>8</sup> もちろん、この移植手術は、たった一台のナノ・マシーンでは、気が遠くなるほどの時間がかかることが予想されるので、無数のナノ・マシーンをあなたの頭蓋内に送り込むことが必要であろう。

<sup>9</sup> とはいえ、この「脳移植ケースその2」では、自分が存在しなくなる、と考える人が、さきほどの「脳移植ケースその1」よりもおそらく多いことは予想できる。

<sup>10</sup> 気づいている人も多いと思うが、本来ここでは、私たちがある事柄や事態を想像するとはどういうことなのか、その際、一人称的観点（主観的観点）と三人称的観点（客観的観点）はどうなっているのか、そして自分が他人であると想像するとはどういうことなのか、あるいは、時間軸上の位置がどう影響するか（未来方向と過去方向のどちらの視点に立っているか）といった問題が扱われなければならないのだが、これらの問題はまた別の機会に取り組みたい。

## 2-2

もう一組，別の思考実験を見てみよう。

**拷問ケースその1:**不幸にも、あなたは今度は拷問を受けることとなってしまった。しかし、拷問官は、あなたに心配することはないと言う。拷問官の説明によると、拷問は次のように行われるそうだ。拷問は身体に鞭打つ（！）仕方で行われるが、あなたの希望があれば、拷問の実行前に、あなたの身体からあなたの意識を抜き取り消去することができるそうだ。こうすれば鞭打たれるのは、あなたの身体ではあるが、あなたの意識を有するものではないから問題ないだろう、というのである（おそらく拷問官はあなたを心理説論者とみなしているのだろう）。さらに、希望があれば、あなたの意識が抜き取られたあなたの身体に、誰か別の人物の意識を持たせることも可能だ、というのである。拷問官によれば、（心理説にたつならば）拷問を受けるのはあなたではないのだから、拷問による苦痛を心配する必要はないだろうというのである。

この「拷問ケースその1」は、ウィリアムズによる有名な思考実験であるが、ウィリアムズは、この思考実験の事例を、人の同一性には身体的なものが必要であることを導き出せるもの、として用いているのである<sup>11</sup>。ウィリアムズによると、もし人の同一性の根拠に意識的なものをおく心理説の立場が正しいのであれば、この事例では、意識を消去されることによって拷問を受ける人は自分ではなくなるのであるから、拷問に恐怖を感じる必要はないはずである。それにもかかわらず、私たちは、たとえ意識を消去されたとしても、自分の身体が鞭打たれることに怖れを抱くであろうし、さらに他の人物の意識を有することになっても、やはり自分の身体が鞭打たれることへの恐怖を払拭することはできないはずである。このことは、意識にではなく、身体の継続性にこそ、人の同一性の根拠があると私たちがみなしていることを顕かにしているものであり、だからこそ、自分の身体

---

<sup>11</sup> Williams (1970). 少し簡潔なものにしている。

が鞭打たれることに恐怖を抱いてしまうのだ、とされるのである<sup>12</sup>。

しかし、この思考実験の事例も、少し要素を変更することで、同様の状況であっても、異なる結果を引き出すことができるように思われる。

**拷問ケースその2：**やはりあなたは拷問を受けることとなってしまった。しかし、拷問官は、あなたがウィリアムズにならって身体の継続性にこそ人の同一性があると考えているのならば、心配することはないと言う。拷問官の説明によると、拷問は次のように行われるそうだ。拷問は身体に鞭打つ仕方で行われるが、あなたの希望があれば、拷問の実行前に、鞭打たれるあなたの身体を別の人物の身体にすり替えることができる、というのである。しかし、鞭打ちのあいだは、その別の人物の身体にはあなたの意識をそっくりそのまま移植しておかなければならない。拷問であるからには、誰かが苦痛を感じなければ刑として成立しないのだから。しかし、あなたが身体説をとるならば、その苦痛を受けるのは、あなたではなく別人物なのであるから心配することはない。もし鞭打ちされる別人物の身体を哀れに思うのであるならば、鞭打ちを受ける身体をレプリカントの身体に交換することもできるそうだ。その際も、あなたの意識をそっくりそのままレプリカントに移植することにはなるが、というのである。

しかし、この状況で、おそらくあなたは、自分の身体が鞭打ちされないで済むことになるからといって、安堵することはないであろう。鞭打ちされる身体が別の人物の身体であろうとレプリカントの身体であろうと、この「拷問のケースその2」において、その鞭打ちの苦痛を受けるのは私である、と多くの人が考えられる。もしこのように考えるのであれば、鞭打ちの刑を逃れる身体が私なのではなく、別の人物の身体であっても意識のつながりがある人物こそが私であると考えている、と言えよう。

ということは、「脳移植ケース」の思考実験の場合と同様、「拷問ケース」

---

<sup>12</sup> もちろん、この「拷問ケースその1」事例であっても、ウィリアムズが意図しているような、身体に根拠をおく立場を導き出すことが、そもそもほんとうにできているのか疑問に思う人もいることだろう。が、ここではウィリアムズの意図に沿って紹介するにとどめておく。この点については注の10も参照。

の思考実験においても、意識と身体とを置き換える、という類似の思考実験の状況であるにもかかわらず、自分と同一であると捉えられる存在者が異なる、という結果を引き出すことが可能だ、ということである<sup>13</sup>。

### 3.

#### 3. 1

前節で見たように、脳移植の思考実験の場合も、拷問の思考実験の場合も、類似した状況から、まったく異なる考えを引き出すことが可能になってしまっているように思われる。このことから、どのようなことが言えるのであろうか。簡単な見通しにとどまってしまうが述べておこう。

類似した思考実験の状況から異なる考えを引き出すことができってしまうことの要因には、個々の思考実験における基本的枠組みや、描かれていない背景や設定、現実世界との照応の程度、などなどが曖昧であるがために、少しの要素の加減によって、論者の好みの結論を引き出してしまっている、という指摘をすることができるかもしれない。あるいは、こうした思考実験は私たちの直感に依存しているものであるのだから、導き出された結論も、未だ不確定なものとしてとどめておくべきものであるのにもかかわらず、あたかも確定的なものであるかのように取り扱われてしまっている、という指摘をすることもできるかもしれない。そうであるならば、これらは思考実験の援用の悪弊の実例ということになるだろう。

このような指摘に対しては、次のような異議が唱えられるかもしれない。例えば、思考実験の状況が類似しているとはいえども、その状況に何らかの変更がなされているのだから、結果が異なるのは当然のことである、というものである。確かに、たとえわずかなものだとしても前提の状況が異なるのであれば、引き出される結果が異なっていてむしろ当然である<sup>14</sup>。

<sup>13</sup> 「脳移植ケース」では、「自分の脳が埋め込まれたの機械の身体」をもつ存在者と「機械の脳が埋め込まれた自分の身体」をもつ存在者という対極にあるものが、「拷問ケース」では、「他の人物の意識をもった自分の身体」をもつ存在者と「自分の意識をもった他の人物の身体」をもつ存在者という対極にあるものが、それぞれ自分と同一である、という異なる結果を引き出すことが可能だ、ということである。

<sup>14</sup> 前提が同じか否か、ひいては、同じ類の思考実験と見なせるかどうか、が問題である。

あの「トロッコ問題」が、最初にその思考実験が提示された際の意図を「超えて」有名になったのは、類似した状況ではあっても、その状況の部分的な設定の違いによって、まったく異なる結論が導き出される（傾向が私たちにはある）、という強いインパクトが後に加わったが故であろう。

適切な思考実験とはどのようなものであり、どのような思考実験の用い方が正当であるのか、という問題は重要な課題である。しかしながら、この課題についてはいまは扱わずに離れ、ここで取り上げておきたい次の点を指摘することにした。

それは、人の同一性の問題における思考実験では、論者の結論、論者の考えがすでに前提されてしまっているように思われる、ということ、つまり、議論が論点先取になってしまっている、ということである。

人の同一性の問題における思考実験の先駆けに敬意を表して、ロックの「王公と靴直し職人」のケースを再び取上げて考えてみよう。「王公の意識が靴直し職人の身体に入りこみ、宿ったとする」という記述がなされる時、ロックも、そしてロックの文章を読む私たちの多くも、王公と継続している王公の主観性 (subjectivity)、一人称的観点 (first-person perspective)、人格性 (personhood)、などといったものが、意識と共に（そして読者自らの視点を重ね合わせて）王公の身体から靴直し職人の身体へと移る状況を読み込んでしまっていることだろう<sup>15</sup>。

しかしながら、意識に人格性の根拠がある、ということは説明されなければならない被説明項であって、このことを説明のうちに用いることは、論点先取、ないしは循環論である。もし、この事例に中立的に臨むのであれば、「王公の意識が王公の身体から離れたとき」には、王公の意識と共に王公の人格性が伴ってある場合と、王公の身体と共に王公の人格性が留まってある場合との、少なくとも、これら両方の事例を公平に想定していなければならないはずである。そして、どちらの場合が適切なものであるかは、この思考実験そのものからはおそらく導き出せないはずである。

人の同一性問題における、その他の思考実験の事例においても事態はほぼ同様である。その多くが、思考実験において説明されるべき事柄（人が同一であることの根拠）をあらかじめ読み込んでしまって事態の推移が描

---

<sup>15</sup> なぜ、そうになってしまうのか、という問題は興味深いものであるが、論じることができない。注の10を参照。

写され、帰結を導き出してしまっている。このようなわけで、論者が自説に有利な立場を引き出しているに過ぎないがために、類似の思考実験から、異なる考えを導き出すことができてしまっているのである。

### 3. 2

人の同一性の問題における思考実験が論点先取、循環論になっているのであれば、こうした思考実験から得られる知見は何もない、ということになるのだろうか。

しかし、おそらくそうではない。論点先取に陥り循環論になっている、ということからは、否定的な論点ばかりではなく、肯定的ないし積極的に捉えるべき論点も引き出すことができると思われる。

では、その積極的に捉えるべき論点とは何か。それは、思考実験を用いた人の同一性についての論証が循環論になっている、というこのこと自体が、人やその同一性というものが、基礎的な概念である、ということを示しているのではないか、ということである。すなわち、人やその同一性という概念は、循環に陥らない仕方では有効な説明を施すことのできない根本的なものである、ということ、したがって、人の同一性の根拠というものを、人そのものではない他の個別的な事柄（例えば、意識とか身体とか）に求めるようなことはできることではない、ということ強く示唆しているのではないか、ということである。ロウの言葉を借りるならば、人や人の同一性というものが「他のものではない、それ自身のうちにのみあるもの、であり[……]、原初的 (primitive) で根拠づけられない (ungrounded) ものである<sup>16</sup>」ということである。

もし、人の同一性が原初的なものであるとするならば、すなわち、それ以上さらに遡って分析、説明することのもはやできないようなものであるならば、人の同一性を、他の個別的なもので説明しようとする試みが循環的なものになってしまうことは、ある意味避けられないことである<sup>17</sup>。

<sup>16</sup> Lowe, E. J. (2009), p.140.

<sup>17</sup> もちろん、このことは人やその同一性について何も論じることができない、ということの意味するわけではない。例えば「説明 (elucidation)」を通して、その概念を明らかにしていくという方途は有効なはずである。Cf. Wiggins (1987).

科学的な実験においても、実験者の目的や意図とは異なる結果が産み出されることがあるが、思考実験もその例外ではない。人の同一性の根拠を意識や身体といったものに求めようとする思考実験が、却って、人や人の同一性は、こうした意識や身体といったもののみでは適切に根拠づけることができないような基礎的なものである、ということを示しているのである。少なくとも、人という概念から分断され隔絶されてしまったような意識や身体なるものでは、人やその同一性を適切に扱うことは困難である、ということが顕わになっている、と捉えることができるのである<sup>18</sup>。

### まとめ

人の同一性を巡る議論においては、しばしば思考実験が扱われる。ところが、これらの思考実験では、ほとんど同様の状況から、思考実験を用いる論者の自説に有利な結論を引き出すことが可能である。これは、人の同

---

<sup>18</sup> ここでふれたような「人や人の同一性はさらに遡って説明することのものはやできないようなもの」と捉える立場は、単純説 (simple view)、あるいは非還元主義 (non-reductionism) などと呼ばれる。

ここで単純説という捉え方について一言ふれておくことにする。この立場の規定には、検討の余地がまだ残されているが、特に注意しなければならないことは、単純説がしばしばそのまま靈魂説 (魂説) と同一視されてしまうことが多い、ということである。靈魂説とは、すなわち、人の同一性の根拠は魂にあるとする立場である。

しかしながら、あるものが単純である、とは、あくまで、そのものがそれ以上遡って分析できない原初的なものである、という意味であり、人が単純なものであるとしても、人は靈魂である、ということの意味するわけではない。それどころか、靈魂説が人の同一性の根拠を魂におくのであれば、それは人とは異なる別のもので人の同一性を説明しようとするアプローチであって、むしろ単純説とは対比される複合説 (complex view) の名こそ靈魂説にはふさわしいとさえ思われる。もしも、靈魂の同一性問題というものが成立し得て、その根拠を求める文脈というものがあるのであれば、そこでならば、靈魂説という立場は単純説と言うことができよう。いずれにせよ、靈魂が単純であるということ (靈魂というものがもしあるとするならば、おそらくそれは単純なものとはか言いえないようなものであろう) と、単純なものである靈魂で何かを説明しようと試みることは、当然のことながら、まったく異なることである。

一性を巡る議論において用いられる思考実験が、論点先取ないし循環論に陥ってしまっているからである。

しかし、これらの思考実験が循環論に陥ってしまっている，ということからも，人やその同一性に関わる重要な示唆を得ることができる。それは，人やその同一性というものが，根本的で原初的な概念である，ということである。思考実験によって，人の同一性の根拠が意識や身体にあることを示そうという試みが，却って，人やその同一性が意識や身体といったものでは適切に根拠づけることができない基礎的なものであることを示しているのである。

## 文献表

- Gasser, G. and Stefan, M.[eds.] (2012) , *Personal Identity: Complex or Simple?*, Cambridge University Press.
- Locke, J. (1975) , *An Essay Concerning Human Understanding*, ed. by Nidditch, P. H., Oxford University Press.
- Lowe, E. J. (2009) , *More Kinds of Being*, Wiley-Blackwell.
- Shoemaker, S. (1963) , *Self-Knowledge and Self-Identity*, Cornell University Press. (『自己知と自己同一性』管豊彦・浜渦辰二訳，勁草書房，1989年。)
- Wiggins, D. (1987) , “The Person as Object of Science, as Subject of Experience, and as Locus of Value”, in A. Peacocke and G. Gillett (eds.) , *Persons and Personality*, Blackwell, pp.56-74, reprinted in his *Continuants: Their Activity, Their Being and Their Identity Twelve Essays*, Oxford University Press, 2016, pp.71-86.
- Wilkes, K. V.(1988), *Real People: Personal Identity without Thought Experiments*, Oxford University Press.
- Williams, B. (1970) , “The Self and the Future”, *The Philosophical Review*, 79, pp.161-180, reprinted in his *Problems of the Self*, Cambridge University Press, 1973, pp.46-63.
- 金杉 武司 (2022) 『哲学するってどんなこと?』ちくまプリマー新書。
- 野矢 茂樹 (2002) 『同一性・変化・時間』哲学書房。
- 福田 敦史 (2005) 「人格概念の原初性と能力としての想起—人格の同一性を問うということ—」『高崎経済大学論集』第48巻第1号，pp.45-54頁。